Die Eiche ディ アイヘ
http://www.jdg-chiba.com

Japanisch-Deutsche Gesellschaft
der Präfektur Chiba
〒274-0822 船橋市飯山満町 2-518-1
清和会第２ワールドナーシングホーム内
電話 047-461-9111 Fax 047-461-7010

第23回年次総会

-書面審議にて行われる-

第23回千葉県日独協会年次総会は、新型コロナウイルス感染が拡大しパンデミックの状況下で、5月から6月13日(土)に変更して開催を予定していましたが、政府の「緊急事態宣言」が更に延長された等により、一同に会しての総会開催は難しい状況になりました。

前段階として、3月の運営委員会は、コロナ対応のためメールにて意見交換を行い、理事会、総会等の開催方法及びスケジュールを検討しました。

先ず、理事会については書面方式にて開催し、4月15日までに総会議案を審議し、理事の承認を得て議案を総会に諮ることを決定しました。

その流れを受け、総会も理事会同様に書面方式とし、4月18日に資料を全会員に郵送し、4月30日までに審議結果を返送いただく方法にて審議を行いました。

書面による審議の結果、締切り時点で会員数131名の内、議案に対する承認93名、非承認0名、未回答38名となり過半数の66名を超えており、第23回年次総会議案は規約第10条に基づき多数決を持って原案通り承認されました。

千葉県日独協会総会議案書

■2019年度事業報告(案)

下記の事業について報告、承認されました。

1. 主な会議：運営委員会・理事会・年次総会（記念講演会・懇会）
2. 主要行事：定例（総会記念講演会・ビール祭り・ドイツ軍人慰霊祭・クリスマス忘年会・新春講演会）、文化教養（ボトルシップ研究会・青壮年部会・菩提樹委員会その他）、特別（ドイツ人奨学生との交流会・市川ドイツデー・習志野ドイツフェアー・ドイツ捕虜解放100周年記念事業等）
3. 協会通信"Die Eiche"の発行（偶数月年6回）編集委員会開催
4. 協会ホームページ運営、管理
5. 全国日独協会連合総会参加
6. デュッセルドルフで行われた千葉県との姉妹提携署名式への参加
7. 当協会主催によるドイツ大使の講演会、懇親会開催、等

イーナ レーベル駐日ドイツ大使

慰霊碑とキーゼヴェッター武官

■2019年度決算報告(案)

一般会計実績：収入の部合計1,306,100円、支出の部合計625,049円、次期繰越金681,051円、特別会計実績（日独友好及び記念行事）:収入の部総合計1,841,220円、支出の部総合計783,268円、次期繰越金総合計1,057,952円となり、適切を認める監事の監査報告書が添付され承認されました。

■2020年度事業計画(案)

2019年度同様、上記に記した、主な会議、主要行事・定例・文化教養活動について2019年度実施行事を柱に計画、また、協会通信"Die Eiche" の発行(原則偶数月年6回、編集委員会開催)、協会ホームページの運営、管理等の事業計画については、承認されましたが、新型コロナの影響で当初の計画が大きく変わることが予想されます。

■2020年度収支予算(案)

一般会計予算：収入の部合計1,198,554円、支出の部合計525,000円、次期繰越金673,554円、特別会計予算（日独友好及び記念事業）：収入の部総合計1,215,961円、支出の部総合計167,200円、次期繰越金総合計1,048,761円にて承認されました。

■2020年度役員(案)

下表の役員40名が承認されました（新任役員は下線付き）。また、報告事項として運営委員会は、青字で示した以下のメンバーで推進すると報告されました。（常任理事：志賀 久徳）

役員（任期 2020年4月-2022年3月）

名誉会長	平尾 浩三	宗宮 好和		
会長	金谷 誠一郎			
副会長	木戸 裕	杉田 房之（事務局長）		
常任理事	安藤 永一	勝見 浩明	志賀 久徳	土屋 有里
	本間 実里	本橋 緑（兼会計）		
	吉川 三朗			
理事	石元 成子	植松 健	大野 亘児	岡村 三郎
	尾崎 裕一	北村 侑三郎	木戸 芳子	草本 晶
	近藤 弘	坂本 隆夫	坂本 宗秋	須古 正恒
	竹内 優	田中 瑛	田中 正延	友野 信善
	内藤 敏子	中村 孝子	永池 克明	西阪 知晃
	野村 陽子	堀江 弘隆	松江 美代子	宮藤 宏
	室田 真由見	綿貫 尚		
会計	本橋 緑（兼常任理事）			
監事	中野 泰行	湯浅 正人		
事務局	山本 博秋			
顧問	林 静誠			
	カルステン キーゼヴェッター武官（ドイツ連邦共和国大使館 ドイツ陸軍大佐）			
	戒田 重雄（陸上自衛隊第一空挺団長兼習志野駐屯地司令 陸将補）			

新型コロナ問題と今後の協会活動について

この問題に関しては昨年末頃から報じられ始め、1月8日には、WHOが新型ウイルスと認定、欧米における感染者増が連日報道されるようになりました。特に、2月3日に横浜港に入港した大型クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号で感染者が乗船していることが判明、乗客はしばらく下船出来ず、その間にも感染者が増加するなど問題化。海外では、外国人の入国禁止、都市の封鎖などが始まり、我が国でも4月7日に政府が緊急事態宣言を出して、人口の多い関東圏、関西圏、福岡で5月6日迄、不要不急の外出自粛を要請。4月16日にはこれを全国に拡大。その後、5月4日には、5月6日としていた期限を5月31日まで延長する一方で、34県に関しては5月14日に北海道、東京、神奈川、千葉、埼玉、大阪、兵庫、京都を除く、39県で緊急事態宣言を解除、これ等の県では休業要請を緩和し始めています。1日も早く、昨年までのような状態に戻って欲しいものですが、米国のハーバード大学公衆衛生大学院、ミネソタ大学などの見方としては、2022年頃まで続く・・とのことです。このような情勢下、千葉県で活動する当協会としましては、毎月第2土曜日に開催する運営委員会を、オンライン会議に切り替えて実施、今後の諸活動は3密を避ける形のものとすべく、工夫していきたいと考えておりますので会員の皆様のご協力を何卒宜しくお願い申し上げます。（会長：金谷 誠一郎）

福祉の町ベーテルとのぞみ会 そしてユーラシア一人旅

-会員 井本義孝-

本稿は、当協会の年次総会後の記念講演会での講演をお願いしておりましたが、新型コロナ問題で総会開催が困難となりましたので、内容を紹介させていただきます。

井本氏は、1969年3月末に、お一人で横浜～ナホトカ～モスクワ～ヘルシンキ経由でドイツに到着、以後ビーレフェルト市郊外にあるベーテルで1年半の研修後、1970年9月9日にハンブルクを出発し、ギリシャ、トルコなどをバスと列車で回り、10月17日に福岡に帰着するまでの思い出を記述して頂いたものです。：金谷記

ドイツ渡航前の井本氏
（旗の後ろ、右から2番目）

■福祉の町ベーテルと「のぞみ会」、そしてユーラシア一人旅

ベーテルは、ドイツ北西部のビーレフェルト市郊外にあり、約3.5平方キロの敷地に障害のある人々とそうでない人々が色々な社会資源を活用しつつ助け合っている、いわば広義の共同体といえよう。

障害者の町として著名なベーテルは、1867年数名の篤志家が癲癇の子を農家で保護したことにより始まり、その後着任した、フリードリッヒ フォン ボーデルシュヴィンク師の卓越した指導により、約150年を経て今や欧州随一の癲癇研究所、総合病院、こども病院等の医療施設、数多くの職業訓練施設、老人ホームや障害者施設等が存在している。又幼稚園から大学までの教育機関はもとより、およそ普通の町同様の郵便局、銀行など公共機関がある。従ってベーテルは心身を病んでいる人々、癲癇の発作を持つ人、知的や身体に障害を有する人々、高齢で身寄りなき人々が安心して生活できる街である。

フリードリヒ フォン ボーテルシュヴィンク家の墓

ベーテルは、創立者の方針で今日まで、ただ当事者を保護収容するだけでなく、医療的手段や数々の療育方法と並んで、自ら働くことが恒久的な社会復帰の手段として、具体的な作業方法に基づいて労働する方針を重んじた。「手には仕事を心に神を」のモットーを基に、印刷製本、家具(見事な装飾の寝棺まで）クリーニング屋、パン工場、靴屋、花屋、それに庭園、農場、牧場などがノルマなしに提供され、職員と障害者が共に共存共栄している。

特筆すべきは、職場での始業礼拝、シオン教会での礼拝が捧げられ、神への感謝の念が基盤となっている。そして古切手までもが収集整備室で商品となり、販売されて運営に寄与している。また、重度障害者の「ヤボク」での最新設備、行き届いた水深調整可能な大屋内プールなどは、国際障害者年の1981年以前から存在してきたことを思うと感慨無量である。忘れられないのは、ベーテルを支えてこられた数多くの奉仕者が眠る2つの霊園の存在である。そこに立つ時、神と人に捧げた数多の尊い人生に粛然とするのみである。

■ミッドナイトミッション「のぞみ会」

1953年、ドイツの宗教団体MBKミッションより、二人の宣教師が我が国に派遣された。戦後の東京の夜の町を回り、援けを求める女性達を保護し、生活の場を与えたことから、「真夜中の宣教」とでもいうべき法人が誕生した。3年後、様々な理由で支援を必要とする女性の為の「緊急一時保護所」として「マナの家」が杉並区に開設された。しかし、その後、手狭となり、千葉県富津市に「望みの門学園」が開設された。この為に尽力された、ドーラムンディンガー師がザレプタ「母の家」にのぞみ会支援の要請に来られており、偶々私を見かけられ、それが30年後、のぞみ会に招聘されることになるとは、今もって奇しき神の御啓導に感謝せずにはおれないのである。その後、富津市を中心に、福祉の町のヴィジョンの下、今は児童、老人、婦人、乳児、障碍児の施設を初め、訪問看護、福祉相談、など、地域サービスに努め、利用者はおよそ400名、職員300名の体制で運営されている。

ザレプタ「母の家」全景

注：「ベーテル」とは、旧約聖書創世記28章17節にある「神の家の意味」。ディアコニッセの養成所「ザレプタ母の家」、「ディアコーンの家ナザレ」との三者の複合法人であり、ボーデルシュヴィンクで最も著名な法人名である。

■ユーラシア一人旅

ベーテルに1年半滞在した後、1970年9月にハンブルク中央駅を出発して、途中下車をし乍らギリシャ、トルコ等6か国を経由して福岡に戻ったのは47日後の10月17日であった。

中近東のバスと列車の一人旅は、今思うと自分でも呆れるほどの向こう見ずの冒険であった。特に印象深かったことを2点ご披露したい。イランのテヘランから約700km南の有名な「ペルセポリス遺跡」を訪問中のバスの中で、イランの教師らしい紳士から、大きなザクロをいただき、その果汁が美味甘露であったが、それにもまして、「原油が1バーレル1ドル20セントで、その内わずか５セントがイランに入るのみで、残りは全てメジャー（英米の石油会社）が取り上げる・・」とアングロサクソンへの恨みつらみを語っていて、私にも紳士の気持ちが充分理解できた。あと一つの記憶は、パキスタンのラホールからデリーを目指し、カシミール近くの国境で下車、銃を構えるパキスタン兵の前の中立地帯を通りインド兵が監視する中、トラックに荷を積む人々に鞭を振るって監督しているのを目撃、20世紀のアジアは未だ未だ後進国であることをつくづく思わされたのであった。

（社会福祉法人　ミッドナイトミッション　常務理事　井本義孝）

ボンとコブレンツの結びつき
-ベートーヴェン生誕250周年記念-

沼屋 譲

今年は、ベートーヴェン生誕250周年という記念の年にあたるので、各地ではその準備に大忙しであろう。彼が生誕したボンの古い墓地に作曲家シューマンが妻クラーラと眠る墓と立像があることはよく知られているが、ベートーヴェンの母親が眠る墓もあることを知る人は、意外に少ないようだ。墓の入口に有名人の墓の位置を示す図面が展示されているが、それを見ているとき、ベレー帽をかぶった初老の紳士が帰ろうとして僕に気づいた。「誰の墓を探しているのかね」と尋ねるので、ベートーヴェンの母親の墓ですと答えると、「それでは案内してあげましょう」と言う。ぼくが遠慮するのもかまわず、「なあに、気にすることはありませんよ」と言ってささっと歩きだしたので、ぼくも彼に従った。

門を入った右手に目的とする立派な墓が目に入った。銘板には、マリーア マグダレーナという名前が、はっきりと読み取れる。その女性は、ライン河を少し遡ったコブレンツという町で生まれたが、二十歳で既に二人の子供と父親を失い、失意のまま下流のボンに住むケルンの宮廷楽師でテノール歌手ヨーハン ベートヴェンのところに嫁いだことになる。宮廷楽師というと聞こえはいいが、経済的に豊かでなかった。当時は、まだケルンの町に中世以来つづく選帝侯が、ハープスブルク家から派遣されている時代だったのである。

ベートヴェンの両親肖像画
Wikiデータより引用

ボンで生まれた最初の子供も失ったが、次に生まれたのが、大音楽家に成長するベートヴェンであった。さらに四人の子供を産んだが、不幸にも四十歳そこそこで結核のために世を去っている。ルートヴィッヒがまだ十七歳のときであった。母親の亡くなった年に一度、彼はウィーンに行き、モーツァルトに逢っている。しかし、結果は思わしくなく、暫くして彼は帰国している。母親が気掛かりだったのはなかろうか。

ボンの古い集合墓地には、シューマン夫妻以外にも多くの有名人の墓がある。F.シラーの奥さんとされる人の質素な墓石まで説明して頂いたが、不勉強なぼくにはとても全て判るはずもなかった。別れ際にお礼として、日本から買っていった記念切手にスタンプを押した装飾つきの封筒を差し出すと、彼は喜んで「わたしはシューマッハーと申します」と名乗った。

ボン市内には、ルートヴィッヒの住んだ家が生家を含めて、三軒判明している。しかし、いずれも借家であり、幼いころの借用期間が、いずれも短い。楽師長であった祖父には、子供がヨーハン（＝作曲家の父）一人だけであった。その祖父が息子の結婚に反対したせいか、ボンの小路の近くに引っ越しながら一緒に暮らしていない。祖母が晩年、身を持ち崩して修道院の世話になり、夫の葬儀にも出席できなかった。書物には書かれていないが、新婚のお嫁さんは、どれほど気を遣ったことか想像に余りある。彼女は引っ越ししたとか出産など、苦労が少なくなかった筈である。だが最後には、不世出の天才と称賛される息子を世に送り出したのだから、その労苦は報われたと言っていいだろう。

ベートーヴェンの生家
Wikiデータより引用

パソコンで"Mutter Beethoven Haus Koblenz"というサイトを開くと、「作曲家ベートヴェンは幼いころ、コブレンツのこの家で母に育てられました。」と書かれている。そういう時期もあったことであろう。彼女の故郷「エーレン ブライトシュタイン」は、ライン河とモーゼル河の合流する地点から見上げたに過ぎないが、現在はロープウェイも架かり、修復された彼女の生家も参観できるという。ベートーヴェンの研究もそこまで進んでいることがうれしい。

旧東ドイツでの思い出

ドイツと私

ドイツと私 – 秋草 史幸

私のドイツ経験は、分裂国家ドイツと再統一後のドイツを通じ、その間の変化を目の当たりにして、社会主義国東ドイツの当時の現実を語れる事だと思います。

まず、分裂国家ドイツの象徴・ベルリンの壁は、父がドイツ留学中だった1961年に造られました。その後、私は企業からの留学生として1975～76年西ドイツに滞在し、旧東ドイツを垣間見るチャンスを貰いました。東ベルリンへは観光バスではなく、自分で列車、自動車、徒歩と色々な方法で入りました。ライプチヒへもメッセの時に発給されるビザを利用し、そこから列車で日帰りのドレスデン行きも断行しました。車掌に西ドイツマルクでチップを渡し、難なくドレスデンの往復切符を手に入れました。ドレスデン駅からの社会主義国のアパート群、それに続く廃墟の町の中心部は、戦後復興を遂げた西ドイツとは比較になりませんでした。これは長くは続かないと感じました。ライプチヒで民宿に2泊し、帰りに中央駅から西ドイツ行きの列車に乗りました。3月中旬はまだ寒く、駅のホームには、半分しか屋根がなく、屋根なし部分に雪が積み上げられていました。客車内のスチームには蒸気が配給されず寒くて震えてしまいました。西側との国境駅で車内に「シュー」という蒸気の音がして暖かくなりました。窓の外では「西ドイツへようこそ」と叫びながら大きな「やかん」から暖かい紅茶を紙コップに注ぎながらおばさんが配っていました。自由な国・豊かな国に戻って来たんだという気持ちがしたのを覚えています。

旧東ベルリンのPariser Platz

ポツダム会議が開催されたCecilienhof城

旧東ドイツを見て「これは長くは続かない」と感じたのに13年半も経ってベルリンの壁が崩壊しました。その4か月後に家族を連れてデュッセルドルフに赴任しました。さらに駐在員事務所を開設するため、旧東ベルリンに行きました。そこで西側諸国のオフィスに使えるビルは唯一棟のみ、事務所開設パーティーに使えるホテルも一つだけでした。しかもそのホテルの運転手が西ベルリンの道を知らないという現実に直面し、日本から来た方々を空港に送るのが遅れてしまいました。それから4年経ち、日本に帰る前に少しでも東ドイツを見ておこうとエアフルト、ヴァイマールなどテューリンゲンの古い町に出掛けました。そこはまだ旧東ドイツの儘の壊れかけた街並みが並んでいたのが印象的でした。

復元されたゼンパーオーパー 2回廊のバー

帰国し20年後の2014年の年末にベルリン、ライプチヒ、ドレスデンを訪問しました。西ドイツと同じく賑わって見えました。ドレスデンも旧市街が復興して美しい町並みが出現していました。もはや社会主義がなぜ崩壊したのかを知る由もありません。

活動報告

-Skype会議の導入スタート-

千葉県日独協会の編集会議、運営委員会は、毎回船橋駅前の「FACE」を会場にして開催されてきました。しかし新型コロナウィルスが蔓延する中で、「FACE」も一時閉鎖されることになり、3月の定例会議は実施できませんでした。4月になっても事態は好転せず、その間、重要事項の審議は、メールによる書面会議で行ってきました。

4月からは新年度となりますので、新しい委員の方々も含めて、対面に近い形での会議ができないかということで、4月に入り有志の間でSkypeによる会議の実験を何度か試行しました。

その結果、何とかできそうだという感触をつかみましたので、5月９日（土）の編集会議、運営委員会はSkypeを使って行われました。実際やってみますと、思わぬトラブルもありましたが、無事会議を終了することができました。

Skypeでの編集会議の様子（5月9日）

アフター・コロナの社会は、ビフォアー・コロナの社会には戻らないとも言われています。コロナ収束後の社会がどう変わるかわかりませんが、千葉県日独協会でもオンラインを使った活動など、新しい事業の展開も考えられるのではないかと思います。いずれにせよ、一日も早くコロナ危機が収束し、安心して会員同士の交流ができる日が来ることを願っています。（副会長：木戸 裕）

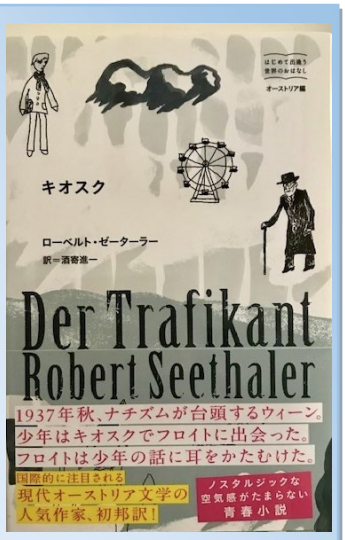
映画/Film

“Der Trafikant”

今回紹介する映画は、ニコラウス・ライトナー監督作品『17歳のウィーン フロイト教授人生のレッスン』（原題：『Der Trafikant』）です。

昨年日本国内で開催された「EUフィルムデーズ2019」では、オーストリアからの出品作品としてオープニング上映されましたが、客席は満員状態でした。

原作はウイーン生まれの小説家 ローベルト ゼーターラーが書いた『キオスク』で、2012年にオーストリアで出版されて以降、社会現象に発展するほどの人気で、ドイツ国内で50万部以上が発行されたベストセラーとなり、和訳本も発行されています（東宣出版刊、酒寄進一訳、1900円税別）。



作品の舞台は、ナチス・ドイツとの併合に揺れる1937年当時のウイーンで、小さなタバコ屋に見習いとして田舎からやって来た17歳のフランツが、店の常連客の一人である精神分析学者ジークムント フロイトと知り合い、彼からの教えを請いながら、成長していく姿が描かれています。

ナチスによる抑圧や、老いから来る病に耐えながらも、フランツの人生に影響を与えるフロイト教授を演じているのは「ベルリン・天使の詩」、「ヒトラー ～最期の12日間～」等で主演を務め、昨年2月に惜しくも亡くなった名優ブルーノ ガンツですが、本作が彼の遺作となりました。

日本では今年の7月24日（金・祝）から全国でロードショーの予定ですが、新型コロナウィルス感染拡大により映画上演が中止されている昨今、是非上演されることを願ってやみません。

（常任理事：本間 実里）

今後の予定

●今後の活動は、新型コロナウィルスの感染状況の動向を注視し、検討できる時期が来ましたら、運営委員会にて定例行事、文化・教養行事、特別行事の企画検討を行います。

会員情報

法人会員　医療法人 同和会 千葉病院、社会福祉法人 清和会、（株）京葉ビル管理、（株）和幸電気工事

編集後記

今年は、ベートーヴェン生誕250周年にあたります。今月号の“Die Eiche”では、ベートーヴェン研究家として知られる沼屋 譲氏に特別寄稿をお願い致しました。沼屋氏は、2007年『ベートーフェン わが不滅の恋人よ』（日本図書刊行会出版）を訳出。、2009年には、『新訳 ベートーヴェンの日記』をリリースされています。アマゾンでの著者略歴を拝見すると、新潟県出身、ドイツ語を独学で始め、2人のドイツ人神父にドイツ語会話を学ばれたそうです。新潟大学では、ヴァイオリンを専攻。その後、ドイツでドイツ語を学ばれています。ベートーヴェンの恋人の謎という切り口で前者の著作では、恋文全ページを写真掲載（日本初）とのことにて非常に強い関心を惹き起こされます。ところで、現代に目を向けると、新型コロナの状況は、5月24日時点で首都圏除き、緊急事態宣言解除となりましたが、千葉県日独協会の今後の活動も想定外の状況になっています。従来のように早期に皆様と協会活動を通じて交流を深めることをとを願いつつ、“Die Eiche”の誌面の充実を図る所存です。（勝見 浩明）